

グローバリゼーション、文化ナショナリズム、 多文化主義と日本文化：新たな分析スキームの提案

鈴木貞美

国際日本文化研究センター

はじめに

今日、「国民国家論」や「多文化主義」への関心が高まり、近現代日本の文芸や文化についても、それらの局面について論じられることが多い。しかし、相当に混乱した議論もかなり見うけられる。「国民国家」論については、たとえば、日本の国民国家形成期を焦点にして、西欧やアメリカにおける近代化過程をめぐる新理論——イギリス・ケンブリッジ大学の *New Left Review* を発信源とする *Cultural Studies* の「伝統の発明」論や、アメリカのベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson) の「想像の共同体」論など——を、日本に特殊な歴史的条件を無視して、安直にアテハメる議論がそれである。その特殊な歴史的条件とは、ヨーロッパやアメリカに先んじて、すでに徳川時代、17世紀から都市民衆文化の多様な開花が見られること、広く民衆の間に日本語による読み書きが行われていたこと、ただし、それは平準化されることなく、ジャンルごとに様々な文体規範が成立し、さらに中間層のリテラシーは「漢文」にも及んだこと、そして、日本では「上からの近代化」、すなわち国民国家の制度的形成から次第に国民文化形成へと進んだこと、などである。「伝統の発明」論は、そのような日本の特殊性をよく考察することによってこそ、これまで「西洋化」の側面のみが論じられてきた「近代化」の内実について、それが独自の文化ナショナリズムの形成であること、その「伝統」の再編成のしくみの解明に向かうべきであろう。

近代の文化ナショナリズムについては、グローバリゼーション現象と国民国家主義 (state-nationalism) すなわち少数民族文化の統合の側面と、エスノ・ナショナリズム (民族主義、とりわけ民族分離運動として現れるその文化的側面) とのふたつの側面をよく整理した上で考察する必要があるが、とくに日本のそれについては、前近代まで中国文化に対するものとして形成されてきた文化ナショナリズムが、近代国民国家主義の形成時に西洋文明に対するそれへと組み替えられたこと、それによってアジア主義を内包するものとして形成されたこと、したがって、その内部に、いわば日本主義対アジア主義というふたつの傾向の対立をはらんで展開したことなどを、よく考察しなくてはならない。そして、対外膨張の政策とその実際、すなわち帝国主義の展開において、そのふたつの思想が交錯する様子が見られ、かつ、そこに、それぞれの国家ないしは民族の文化的独自性を尊重するという文化相対主義も絡んで展開したことが、よく見極められなくてはならないだろう。それゆえ、本稿を「グローバリゼーション、文化ナショナリズム、多文化主義と日本文化」と題し、日本文化の近代的再編成と帝国主義的展開について、基礎的、基本的な考察を行う。

本稿は、全体を三部に分け、Ⅰ「グローバリゼーションとそれに対するリアクションズ」では、世界の動きと日本の場合について概観し、Ⅱ「日本の文化ナショナリズムとアジア主義の流れ」では、1.「国民国家形成期」、2.「第1次大戦後から対米英戦争期

へ」の二期に分け、1. では、a. 近代天皇制、b. 「日本文学」という観念、c. 知識層の三元的リテラシーと、d. 日本独自の文芸観の形成について述べる。世紀の転換期、つまり帝国主義戦争、植民地再分割戦争に突入する時期において、思想における「近代の超克」が発生していることにも触れることになる。2. では、「文化相対主義と多文化主義」の展開を、a. 両大戦の戦間期、b. 大東亜共栄圏とその思想について追い、c. で「その問題点」をまとめる。その上で、Ⅲ「日本文芸における多文化主義」では、a. 国民文化の中心から外れる「脱中心」化の動き、b. いわゆる *minorities* を題材にした文芸作品、あるいは被支配民族を描く作品などについて述べ、c. 「1935年ころからの『外地』の文芸、その『内地』における受容」では、とくに「満洲国」における「民族協和」政策について、それが「内地」における多文化主義的動向を生みだしていたこと、また、それが「日満一体化」政策と、いわばダブル・スタンダードによって運営されていたことなどを明らかにする。そして、これらの分析のためのメソッドとしては、西洋文化受容における「受け皿」(receptor)論を、スキームとしては、日本ナショナリズムとアジア主義の重層構造論、明治文化の四極構造論、日露戦争後にはじまる「近代の超克」文化史観を、あらためて提案したい。また、「カミカゼ」特攻隊を生んだ「散華の思想」の発生について、また、「大東亜共栄圏」の一面は多文化主義だったことなども、これまで見逃されてきた問題であることを言い添えておきたい。

I グローバリゼーションと、それに対するリアクションズ

1. 世界の動向

今日の globalization については、経済におけるそれが論じられることが多かったが、最近の日本では、アメリカの一極支配が話題に取り上げられるようになっている。個別資本が国境を越える現象は、いわゆる合併会社の創設など、すでに19世紀末の日本でも観察され、20世紀を通じて次第に盛んになってきたものである。そうした過去に起こった globalization に対して、今日の globalization は、computer の発達によって交通と通信の飛躍的な高速度化と廉価化が行われ、情報が即時に world wide に交換される現象のことを、まず指していた。そして、それに伴ってUSA主導の世界政治が展開され、USA standard の支配力が増大しつつあった。それに対して、イスラーム過激派が一般市民をも巻き込む攻撃を行い、アメリカが「反テロリズムのための戦争」を呼びかけて、それに同調する国家群とによって、圧倒的な軍力でイラクを制圧することが実行された。が、しかし、イラク戦争は「泥沼化」の様相を呈している。それが今日の現状であり、アメリカ国内の知識層は、ブッシュ政権に強い反発を示すとともに、「グローバリゼーション」の語を学会のテーマから外したがつているように感じられる。

グローバリゼーションの原義は、なにかの現象が world wide に広がることにほかならない。したがって、それはそもそも人類が——今日の自然人類学における有力な説にしたがうなら、アフリカから外に出、——人間の文化・文明を地球上に展開してきたこと、すなわち人類、すなわちホモ・サピエンスの歴史そのものということになる。身近な例をとっても、tomato や potato、pepper などが世界的に広がった現象も globalization である。農耕文明もまた——その起源は一つとは限らないが——全地球化した。市場経済、資本主義、大規模機械工業や重化学工業は近代ヨーロッパから世界的に広がったし、オートメーション・システムによる機械製造工程や消費欲望を刺激することによって消費を拡大する大量生産/大量宣伝/大量消費の方式は1920年代のアメリカから先進諸国に広がったものである。土地の私有制も、また、次第にグローバ

イズしたもののひとつである。今日、オーストラリアでもハワイでも、あるいはアフリカでも、先住民たちは聖なる場所、聖なる木があるところや岬の突端に行ってお祈りをする。そこには、もともと区切りや囲いなどなかった。ところが、今日では、先住民の権利を保証するために、そこには柵がつくられ、周囲が公園になったりしている。これは、土地の私有という考え方を持っていなかった人びとに、その権利を保護することと引き換えに、土地に対する支配的な考えかたと妥協させ、制度に組み込んでいることになる。国民国家も18世紀～19世紀を通して世界に広がり、第二次大戦後にも、多くの国民国家がつくられ、国境の線引きがなされたが、それは世界がアメリカとソ連の二大陣営に分割し、その外の「第三世界」と呼ばれる勢力や地域をも、ふたつに分割しようとする動きが続いた。

ところが、1980年を前後する時期に、ソ連とソ連圏が崩壊し、その後には、チェコスロバキアが分裂し、バルカン半島周辺などなど、民族分離運動が盛んになり、国民国家が細分化する動きが生じた。東ティモールではイスラーム圏からキリスト教を奉じる地域が独立した。そして、そのような国民国家の分裂・独立を国連がスムーズに容認することが、今日、定式化されている。ただし、スイスやベルギーなど、ふたつ以上の「民族」が複合、共存する制度を、それなりに確立してきた国家では分裂への動きは見られない。

総じていえば、今日のアメリカ極支配のように見える現象は、まず第一に冷戦構造の瓦解後に生じたものであることを確認すべきであろう。今日の post-colonialism 論、post-modern 論などは、しばしば、かつてソ連およびソ連圏が存在したこと、それによって、いわゆる帝国主義もまた変質したことを忘れがちであることに注意を喚起したい。

米ソ対立と「第三世界」という基本構図でとらえられる戦後世界秩序に深い亀裂が走ったのは、1968年である。ベトナム戦争に介入したアメリカがはっきりと敗走をはじめ、ソ連がチェコの自由化に軍事介入した年である。ビアフラでは飢餓が深刻化した。中国では権力の路線闘争に発する「文化大革命」がいよいよ盛んになり、「社会主義国家の、さらなる革命」という幻想をふりまいていた。そして、世界各地で戦後支配秩序の総体に異議を申し立てる青年叛乱が巻き起こった。1970年代後期には、イラン革命が起こり、「超大国への挑戦」が発せられる。ソ連とその支配権の崩壊の前に、こうした事態が進行していたことを見逃すことはできない¹。通信衛星が実用化されたのも、この年だった。

そして、もうひとつ注視すべきことは、今日のアメリカ極支配化に対して、実に様ざまなリアクションが生まれていることである。今日の世界の人びとは、それぞれの国民国家に帰属しながらも、種々の中間的な集団に属し、さらに新たな中間集団や、より上位の集団を作る動きもあり、それらが対立や亀裂を生んでいることを軽視すべきではない。

第一に、経済と文化のブロック化の傾向もしくは衝動。EU統合などの動きである。フランスでは、この前の選挙で、極右の勢力が延び、知識人が慌てたが、「統合」の動きには、同時にリアクションとして「細分化」に向かうエスノ・ナショナリズムの台頭も伴っている。EU統合は、第一次大戦後、たとえば、ドイツのシュペングラー『ヨーロッパの没落』(Oswald Spengler, 1918-22)に示されるように、ヨーロッパの力が相対的に弱まったことに対して、「統合」の動きが起こったことに起源をもつ。それが、様ざ

1 2002年1月26-29日、日文研海外研究交流室主催のシンポジウム「20世紀の日中関係を振り返る」のうち、「1960年代後期の青年運動」で報告した。『アジア遊学』2002年6月号に掲載。

まなステップを経て、ようやく通貨の統合まで進んだことになる。

それに対して、たとえば2002年春の東アジア首脳会議で、フィリピンのアロヨ大統領が東アジア経済圏構想を提案したように、「東アジアブロック化構想」も最近、しばしば見かける。が、この実現には、かつての日本帝国主義による「大東亜共栄圏」が障害になっていることが指摘されている。すなわち、東アジアでは、ブロック化への衝動と日本のステイト・ナショナリズムが強大化することへの警戒が錯綜している。

第二に、「ブロック化」が進むと同時に、個別地域間、都市間の連携が進んでゆく現象も無視できないだろう。たとえば、この数年、中国東北部には韓国資本の進出が著しい。また日本の東北地方の都市との連携も様ざまに模索されている。

第三に、世界各地で、宗教と民族が勃興している現象がある。そのひとつが、エスノ・ナショナリズムが既存の国民国家を分裂に導く現象である。これは、冷戦によって押さえ込まれていた民族自決権原理が発動したものというべきであり、今日の情勢の分析にポスト・冷戦という観点をぜひとも必要とする理由のひとつである。民族自決権については、次章でふれる。宗教、とりわけ1970年代後期にイランでホメイニによって指導されたイスラーム革命を起点に、イスラームの台頭が世界に様ざまな変化を及ぼしていることも否定できない。Bruce Hoffman, *Inside Terrorism* (London, 1998) は、1960年代末から1990年代半ばまでの国際テロリズムの動向を探って、左翼革命主義からエスノ・ナショナリズム(民族分離派)によるもの、さらには宗教的グループによるその増加を指摘している。この宗教グループによるテロリズムの中には、日本のオウム真理教によるそれも含まれているが、多くはイスラーム過激派によるものである。

イスラームの勃興がキリスト教を主要な宗教とする文化圏を脅かす現象を「文明の衝突」と見る見方もあるが、それに対して、イスラーム圏、たとえばイランのハタミ (Mohammad Khatami, 1943-) 大統領は「文明間の対話」を呼びかけ、ハンチントンも「文明の対話」の必要性に同意している。2001年9月11日に、アメリカの政治・経済の中枢を狙ってイスラーム過激派が行った攻撃に対する報復措置をとる際に、ブッシュ大統領 (George Walker Bush, 1946-) は、これを宗教対立とみなし、「十字軍」という言葉を口にしたことがあったものの、結局のところアメリカ政府は多文化主義の立場を貫き、「反テロリズム」で国内と国際世論をまとめていった。西欧諸国、日本、またロシアや中国の政府は、それぞれ立場にちがいはらみつつも、これに同調していった。イスラーム諸国においても、政府は同調するか、容認する姿勢をとるところが多かった。

つまり、グローバリゼーションに対するリアクションズとして、宗教や民族意識の高揚を無視することは誤りだが、宗教や民族対立を主要なモメントとして、それを分析することも誤りである。今日、グローバリゼーションによって世界が一つのシステムを形づくりつつあることに対して、それに反対する見解も様ざまに出されている。その典型的な例として Hardt and Negri, *Empire* (Harvard University Press, 2000) をあげることができる。これは post-imperialism の世界が、多元的で、しかも、アメリカ主導のひとつのシステムをなしているという意味で、「帝国主義」とは区別し、古代ローマ帝国とアナロジーされるような、という含意で、「帝国」という言葉を用いている。そして、それに対する抵抗主体として、“multitude” を指定するものである。1979年のイラン革命の際に Rūhallah al-Mousavi Khomeynī (1900-89) が発した「超大国への挑戦」に対して、フランスの思想家 Michel Foucault (1926-84) が支持を表明したことにも見られるように、ヨーロッパ知識人の中には反米思想が根強く存続しており、この書物も、その流れにあると見てよいだろう。また、この書物にはキイ・ワードとして bio-politics な

ど、フランスの哲学者 Gilles Deleuze (1925–85) の用語が用いられていることからわかるように、その底に西欧 vitalism が流れていると思われる。ちょうど、大衆論の古典、Ortega y Gasset『大衆の反逆』(1930) が、ナロードニキの運動やファシズムの底に「生命」の氾濫を見て警告を発したのを、転倒した思考法と見てよいだろう²。

メキシコで少数民族や少数者の連帯によって、アメリカの一極支配化に対抗する運動を組織することを訴えているメキシコ先住民族組織 EZLM (サパティスク民族解放軍) のスポークス・パースンで、「マルコス副司令官」(subcomandante Marcos) を名乗る人物の主張は、しかし、それとも異なっている。彼は国民国家の壁を、グローバリゼーションに対して有効なものとして考え、その中で少数者たちの地位をはっきり位置づけることを戦略として立てているからである。これが、かつての帝国主義に対する民族独立運動という図式とも異なっていることはいうまでもない。それによって、南米で、かつてカストロ (Fidel Castro, 1927–) やゲバラ (Ernesto Che Guevara, 1928–67) に代表された革命路線は、今日、影を薄くしている。繰り返すが、冷戦後のアメリカ一極支配化に対する抵抗は、実にさまざまなレヴェルの動きを生んでおり、それをひとつのモメントから論じることは不可能なのである。

2. 日本の場合

日本の場合は、どうか。「普通の国家」論が盛んになり、数年前に「日の丸」、「君が代」が法制化された。「どこの国でも国旗や国の歌をもっているではないか」という議論が盛んになり、それが認められていったのである。このようなことが言われたのは、第二次大戦に敗北した後の日本に、nationalism に対する「アレルギー反応」のような反発が広範にあったからである。「普通の国家」論は、それを払拭させるものだったと考えてよい。私は、「普通の国家」論がさかんになったのには、昭和天皇の「葬儀」が大きなきっかけになったと考えている。昭和天皇が亡くなる前に、重態を心配する記帳運動が、大々的に行われ、また、国際的に、あれほど多数の国家元首や外務大臣クラスを集めたイベントは世界史上かつてないものだった。国際政治には royalty が厳然として働いているということ、を、まざまざと認識させられもした。

そして、今日の日本では、歴史教科書問題に示されるように、revisionism が台頭してもいる。これはナショナリスティックな自信を回復しようという立場から、リベラルな立場の中でも「右より」の人たちが、主張しているものである。彼らは、いわゆる右翼ではない。今日の日本には、民族主義にこりかたまった右翼集団は皆無に近い。戦後、日本共産党が反米民族主義路線を走り、それもあって、赤尾敏など多くの右翼が親米派の立場をとった。そして、最後まで残っていた思想右翼集団も80年代に消えた。今日の日本人は、真性の日本民族主義と向かいあう機会をもっていない。これは今日の日本の思想的特徴のひとつといつてよい。

もう一つ最近の日本の思想的特徴として、現代世界史の中に、ナチスは絶対悪として登録されているが、いつの間にか、というより、とりわけソ連が崩壊して以降、スターリン (Stalin, 1879–1953) に対する反発が目立たなくなった。戦前から日本の左翼運動には、どのように定義するかは別にして、スターリン主義に対する反発が比較的多かったことを特徴のひとつに数えてよいと思うのだが。

2 立命館大学国際言語文化研究所による連続講座、「国民国家と多文化社会」第12シリーズ「(帝国)と国民国家」の最終回「<帝国>と文学: グローバリゼーションの中の言語文化」として、2002年6月26日、立命館大学創思館で行った講演で論じた。本論は、このときの内容が原型になっている。

もうひとつ最近、「日本のカリスマ」などと称して「雪舟」展が開催されると、やたらに人が集まる現象がある。バブル経済崩壊後、日本人は、かなり自信を失った。国際的に民族、宗教が勃興している現象が伝えられ、「日本人よ、自信を取り戻せ」という掛け声もかかり、そのリアクションとして「我々は日本人なのだ」という意識が強く出てきても不思議ではない。それが大衆的に、それも文化的な形で出てきているのではないかと思われる。これが、今後、どのように進んでゆくのか、よく見守る必要があるだろう。

これらに対する私の考えだが、まず、revisionism が台頭するのも、日本のアジア侵略について根本的な反省ができていないためではないだろうか。彼らは、戦後の主流派の反省の仕方を「自虐史観」とし、「力のあった国は、どこもやったではないか。なぜ、日本だけが非難されるのだ」と、侵略行為を容認する立場に傾いている。実際、「侵略したのはいけない」と繰り返すだけでは、その欠点をあげつらう意見が様ざまに出てきても、いたしかたないかもしれない。

ただし、村山内閣が閣議決定したアジア歴史資料センター(国立公文書館内)の情報が公開され、「南京虐殺はなかった」などということは、もうできなくなった。ほぼ6万人殺していることが、史料からわかる。30万人という数字は、当時の軍部の誇大宣伝をもとにしたものだった。そこで、今後は、当時の双方の戦争のやり方に議論が進むことだろう。「イギリスやフランスも同じようなことをやったではないか」ではなく、われわれが考えるべきなのは、なぜ、そのような結果を生んだのか、であろう。なぜ、朝鮮半島や中国に深い恨みを残したのか。イギリスのエジプト統治などとは、どのような点で異なるのか、台湾とのちがいは、などなど具体的に明確にしてゆくことが、これからとるべき道ではないだろうか。同じ東アジアで、中国文化を共有してきた仲であり、かつ人類学的にモンゴロイドに分類される親しい間柄において行われたがゆえに、という議論も、よく耳にするが、そういう側面は無視できないにせよ、しかし、台湾の統治と、朝鮮の統治とは、まるで、そのやり方が相違しているし、「満洲」は独立国家の建設を装ったものだった。

台湾と樺太南部については、それぞれ「日清戦争」と日露戦争とともに植民地再分割をめぐる戦争とはいえるが、台湾や樺太に領土拡大を狙った戦争ではなかった一に勝つての賠償であり、その意味では、対スペイン戦争に勝ったアメリカのフィリピン領有と変わりはない。朝鮮半島に対しては、中国東北部へのロシアの勢力拡大をめぐる日露戦争時に、武力を背景にして「日韓議定書」を取り付け、やがて「併合」に及ぶもので、それらとは明確に異なる³。そして、中国大陸には鉄道を中心に権益を確保する勢力を張り、1932年には中国東北部に傀儡政権のもとに「満洲」という「国家」をつくりあげた。このように正反対にも見える政策がとられたのは、列強の監視下で、いわば19世紀的な勢力拡大ができない状態の中で、日本は帝国主義的な膨張のやり方を、地域的特殊性と時代の変化に応じて、「緻密化」したというべきではないだろうか。

「緻密化」しようとして、イギリスのエジプト統治などに学びつつも、それを逸脱し、しかも極めて杜撰な方策が採られ、とりわけ「併合」のかたちをとった朝鮮半島では、じかに市民社会に手をつけるような統治が行われた。そうした政策に朝鮮人や中国人に対する蔑視が加わり、逆に深い恨みを残すような結果になったと考えるべきではないだろうか。

3 鈴木貞美「『太陽』における国民国家主義の変遷」、鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』(思文閣出版、2001年)を参照されたい。

私が、戦後主流派の戦前の日本に対する反省がおかしいというのは、こうしたことを明確にせずに、対外膨張については「侵略はいけなかった」とするに止まり、「日本は近代化しようとしたが、封建的な精神風土によって、天皇制に絡めとられて、歪んでしまった」とする反省の仕方のものである。これは実質的に一国に閉じた考え方であり、これでは20世紀の国際関係の中で行われた日本の選択を振り返ることはできない。

20世紀前半の動きについての私の基本的な考えは、以下のようなものである。近代のしくみの弊害を克服しようとした社会主義が台頭して、ソ連という「社会主義国家」が成立、帝国主義も社会主義的な政策の導入をはかるようになり、世界構造に変質がもたらされ、その両陣営の対立の解決を全体主義に求めるファシズムやナチズムが台頭する。日本は自由主義圏にあって、独自の近代化をなしとげ、日英同盟を強化しつつ、帝国主義的な対外膨張を国際関係の中で「緻密」化し、国家による資本のコントロールを増大させて、都市大衆文化的な状況をつくりだしたが、立憲主義を保ったまま、なし崩し的に軍国主義に移行して、無謀な対中国侵略戦争に走り、ファシズムやナチズムと手を組みながら、その解決の方途を「近代の超克」すなわち反西洋帝国主義を標榜する「大東亜共栄圏」の形成に進むことに求めて、対米英戦争に突入し、敗れるにいたる。1980年代から文芸批評で追究してきたことを思想・文化の領域に拡大して展開する方法論を開発し、この展開の文化史的な裏づけをより確かなものにする努力を今日でも重ねている。以下、日本の文化ナショナリズムについて、そのアジア主義との重なりに留意しつつ、「大東亜共栄圏」形成までの推移を追ってみたい。

II 日本の文化ナショナリズムとアジア主義

1. 国民国家形成期

a. 近代天皇制

かつての交通の発達による globalization は、乗り物による北半球一周が可能になったときに認めることができる。これはアメリカの大陸横断鉄道の開通（1869）によるもので、この年、スエズ運河も開通している。パナマ運河の開通は、ちょっと遅れて1914年。アメリカの大陸横断鉄道の開通の二年後、北半球を一周したある団体がある。岩倉使節団である⁴。もちろん、西欧文明導入のための視察旅行で、そのとき、岩倉使節団はパリの国立図書館に行き、「フランス人はなんて伝統を大事にしているのだ」と感心している。当然、「日本も倣おう」ということになる。national identity の考え方も身につけて帰ってきたわけだ。こうして日本における「伝統の発明」が行われてゆく。日本のエンサイクロペディアが国家事業として企てられもする。『古事類苑』の編纂である。そして、「イギリスやフランスより日本の方が歴史は長い」と歴史は神代まで遡ってしまう。注意すべきなのは、そのとき行われた「伝統の発明」は、いわば純粋な「発明」というより、かつてあったものの編成替えが主であり、かつ、そのようにして、西欧よりも長い文化伝統を誇るナショナリズムが形づくられていったことである。もちろん、中国のそれはもっと長いわけで、そこに西欧に対して東洋文明の長い伝統を誇る態度、すなわちアジア主義が重なったことにも注目すべきだ。

明治期の国民国家主義の変遷について概観しておこう。前期は、西南戦争などあり、まだ内乱期というべきだろう。神がかった国体論も盛んで、儒学の復興が体制派の知識人の間ではかれ、啓蒙思想とキリスト教思想の導入もと対立関係にあった。この時期

4 国際日本文化研究センター教授、園田英弘氏（故人）に教示を受けた。

にも制度整備は進み、明治20年を前後する欧化主義、いわゆる鹿鳴館の時代を経て、国家神道と日本的儒教を合わせた帝国憲法と教育勅語が出る。ここに政教社の「国粹保存主義」が台頭する。

長い間、日本の「近代化」は、すなわち「欧化主義」として考えられ、それに伝統すなわち反近代を対置する図式で考えられてきたが、これも解体再編成されなければならない。医学などは徹底した「近代欧化主義」をとり、漢方医の駆逐をはかったが、「欧化主義」の中にも、「近代化」に対して、後ろ向きに、古代がよかったとか、都会より田舎がいいとかいうロマンティシズムの流れを受け取った傾向もある。そして、植民地化の危機感と、ヨーロッパのナショナリズムに触発されながら出てくるのが「国粹保存主義」である。すなわち、明治文化の分析にあたっては、近代化とそれに対する反近代化、西欧化と「伝統」の再組織化の四極を立てたスキームによるべきである。その四極を結ぶ二軸の交点に、近代西欧の立憲君主制と「伝統」の「万世一系」イデオロギーとを折衷した「近代天皇制」が座を占める構造である。

幕末に平田篤胤（1776-1843）の「神道」と、藤田東湖（1806-55）らの「後期水戸学」が「日本は神の国」という『神皇正統記』の思想を復活させ、平田篤胤の弟子たちや後期水戸学の人びとが明治政府の周辺にあり、明治14年政変あたりまでは盛んに「神がかった国体論」を唱えていた。明治帝国憲法は、これと立憲君主制との妥協をはかるものだった。絶対主義における「王権神授説」の名残を「神聖不可侵」条項の文言にもつプロイセンやバイエルンの憲法を参考にしたのである。したがって、これもまた、いわば「欧化」と「伝統」との妥協の産物といえよう。

明治期知識人の大半は立憲主義だが、この「欧化」と「伝統」との亀裂がドイツ流の国家有機体説に立つ天皇機関説をめぐる論争として1911年（明治44）に再び露わになりかける。けれども、当時は「日本は神の国」などと言われたわけではない。ふたたび、そういうことが言われるようになるのは、1935年ころから、公明正大など普遍主義を標榜する「神ながらの道」の思想が流布しはじめ、かつ、「昭和維新」運動と連動した「大乘の精神」が叫ばれるようになり、それらを下地として、1937年、つまり日中戦争たけなわのころに、軍部の喧伝にがなされるようになった。

b. 「日本文学」という観念

さて、日本において、前近代のナショナリズムは、中国文化に対抗するものとして形成されてきたが、近代においては、それが西洋列強に対するものへと組み替えられ、かつ、アジア主義と重なりつつ展開する。その独自性は、国民文化の中核としてエリート層の教育に必須のものであった「日本文学史」に明確に刻印されている。

私が『日本の「文学」概念』で明らかにしたように、日本の場合、明治になるまで「歌」や「物語」が「文学」と言われたことは一度もないし、近代的な「文学」に相当する概念も成立していなかった。古来、「文学」は、一貫して、中国語による「経」「史」「詩」「集」をその内容とする観念でありつづけた。

1890年（明治23）、帝国憲法発布の翌年、すなわち教育勅語が出された時期には中学校の教科書を中心に、盛んに「日本文学史」が書かれた。博文館は「国粹保存主義」の旗頭に乘じて「日本文学全書」「日本歌学全書」のふたつのシリーズを出し、その後に「漢文学全書」のシリーズを刊行する。後者は、英語とならんで、明治十年代後半から「漢文」学習が盛んになったことを受けてのものである。

明治期を通じて支配的なのは広義の「文学」、すなわち西欧近代における広義の“literature” (writings) に対する中義のそれ、すなわち“polite literature” (belles-lettres, the

humanities に相当)の観念である。これが、中国流で立派な著作を意味する「文学」とつりあったゆえに、互いに翻訳語となった。しかし、西欧近代の“literature”は、そのうちに狭義すなわち言語芸術、さらには虚構に高い価値を置く観念を伴っており、この点で中国流の「文学」とは価値基準と内部編成を異にしていた。それゆえ、中国では、この観念の受容はなかなか進まなかったが、日本には、虚構の価値を高く置く観念もあり、徳川時代には雅俗混交や価値観の転倒も起こり、詩歌、物語・小説、戯曲のジャンルの観念も成り立ちつつあったために、中国よりも容易に西欧の中義や狭義の“literature”の概念を受け入れたと考えることができる。

“national language”による“literature”すなわち、“national literature”の観念は、ドイツ語圏で18世紀後期に発生し、瞬く間に、ヨーロッパに広がったとされる。日本の場合、これを受容する際に、「国学」的な言語観が受け皿(receptor)として働いたと考えるべきだろう。「国学」の流れは、対中国ナショナリズムを純化させ、古代日本には純粋な日本語があったかのような観念を肥大化させていた。この「国学」の対中国ナショナリズムが、対西欧ナショナリズムに転換され、かつ、西欧諸国より長い歴史を誇る「国語」と「国文学」の伝統が發明されたと考えてよい。

ヨーロッパでもローマ帝国の言語を読み書きしうるのはハイレベルの教養だが、これは、しかし、彼らの national literature ではない。英文学は英語で書かれているものをいい、フランス文学はフランス語で書かれているものをいう。ラテン語の書物はフランス文学にもイギリス文学にも組み入れない。ところが、明治期に作られた「日本文学」は、日本で「漢文」で書かれたものを含めている。「日本文学史」の最初に出てくる『古事記』『日本書紀』『風土記』を考えてみればよい。歴史や地誌を含んでいるのは、ヨーロッパでも「文学史」は polite literature, belles-lettres, the humanities の範囲を扱うので、不思議はない。感情の表出に関しては、和歌が、とりわけ「万葉仮名」の使用が、古代からの日本語の表記の成立の根拠としてあげられるのが通例だが、日本の知的表現の圧倒的な多数は、伝統的に「漢文」が引き受けてきた。そこで、西欧の national literature を模して發明された「日本文学」は、日本製の「漢文」を排除するわけにはいかなかった。それは、まるで西欧各国の“national literature”にラテン語の文献を加えて編成したようなものとなった。当時の日本の知識人たちは、ヨーロッパの national literature の観念に沿いながら、その範囲の書物の歴史を、対抗的に考えたが、“national language”の観念を無視して、近代ヨーロッパの基準とは別の、中国語と日本語のふたつの言語にまたがる独自の「日本文学史」を形づくった。言い換えると、これは「伝統の二重の發明」であった⁵。

しかし、それはスコットランドのキルトが18世紀に入ってランカシャーに住むイングランド人によって發明され、18世紀末ころに民族の伝統衣装として定着した、という類のものとは異なり、過去の遺産の再編成である。その再編成に果たした種々の要因が解明されるべきだろう。たとえばエジプトでは、文学部の「文学」(広義)と言語芸術を意味する狭義の「文学」も同じ“atab”であることは、日本語と同じだが、オスマン・トルコによる征服時代の以前をアラビア文学と呼び、近代以降をエジプト文学として、切り離している。被征服時代が長かったという歴史的条件と、アラビア語には「文語」(フスハ)と「口語」(アンミーア)の区別はあるが、知識層に異なる二つの言語体系のリテラシーが要求されたわけではなく、言語的条件も異なり、そのようなちがいが生じた

5 鈴木貞美『『日本文学』という観念および古典評価の変遷—万葉、源氏、芭蕉をめぐる—』(井波律子、井上章一編『文学における近代—転換期の諸相—』、日文研叢書22、2001)を参照されたい。

のである。

なお、このとき、アイヌ、沖縄の語り物は「日本文学」から排除されている。そして、その「広義の文学」と「狭義の文学」との間に、概念の闘争が起こる。言語芸術を意味する狭義の「文学」は、1906年（明治39）ころ、いわゆる「自然主義」が文壇を席捲したところに優勢に立ったと判断されるが、しかし、広義の「文学」は、昭和戦前期まで使用されつづけていた。たとえば、「円本」を代表する改造社版『日本現代文学全集』の範囲は広義の「文学」である。ただし、内容は小説中心になっている。「広義」の立場にたって、「狭義」を強調するのは、福地桜痴（1841-1906）あたりにはじまる傾向だが、北村透谷（1868-94）、木下尚江（1869-1937）、そして中里介山（1885-1944）と、確実にひとつの系譜をたどることができる⁶。そして、これらは、「史」と「伝」をあわせた「史伝」や、講談に発する「時代小説」、「歴史小説」の流れ、また、日本における「宗教文学」の流れを考える際に欠くことができない問題である。なお、ここには宗教を抱き込んだ「日本文学」が形づくられたことが働いている。

c. 知識層の三元的リテラシー

徳川時代の民衆文化を「国民文化」と論じる意見もあるが、そこでは様々な規範が成立したり、消えたり、浮遊しており、地方差や階層差も大きく、general な文化は成立していないし、それを保障する制度もない。それゆえ、私は、その見解を採らない。明治維新国家が国家形成を進めてゆくのは、様々なお触れを出し、廃藩置県後は県令や県報を出すことによってである。そして、「御用新聞」が、これに寄与した。これらが日本の国民国家形成に働いたメディアである。そして、これには「漢文」読み下し体が用いられた。徳川時代の藩のお触れは、漢字を用いて書かれているが、文法は日本語で、候文である。たとえば仙台藩寛永21年の税制改革「御年貢御定」より、抜き書きすると「一、御蔵入、給分共に、代方、米方にて所務仕らるべく候事」。これに対して、明治政府が採用したのは「漢文」読み下し体である。明治元年10月、切支丹宗門改めより引く。「切支丹邪宗門の儀は堅く御禁制たり、若不審なる者有之は其筋之役所へ可申出御褒美被成下事」⁷。しかし、これが、ただちに日本語の読み書きの標準になったわけではない。

幕末から明治期を通じて「言文一致」論が盛んに唱えられたことは、よく知られている。これについては、かなりの長きにわたって、ヨーロッパにおける俗語革命、すなわちラテン語ではなく、民衆の口語を土台にした標準的書き言葉の創出と同じように見なす見解が流布してきた。しかし、中国の文字の意味とは無関係に、音を借りて、日本語を書くことは、先にも見たように、古代から行われていたし、「漢文」読み下し体による文章も書かれてきた。もちろん、それらは言語学という社会方言であり、「俗語革命」の名に値しないということもできる。民衆の口語を土台とした書き言葉を基準にするなら、それは、中世後期以降、広く流通してきたものである。さらに下位の水準では、徳川元禄期以降には、「会話文」に民衆の口語をそのまま書く記述も行われている。ただし、地方方言がもとになっている。徳川時代の民衆文化の開花は、多様な文章規範を並存させていた。すなわち、日本語で読み書きするという意味での「言文一致」は、すでに様ざまに行われており、その意味での「俗語革命」は日本では起こりえなかった。

国語政策としての標準語の浸透、それと同時並行的に展開する読み書き言葉の平準化

6 鈴木貞美「中里介山の仏教思想」（前掲）を参照されたい。

7 『宮城県史』第2巻、近世史（宮城県史刊行会、1936）p. 240、同第3巻近代史、p. 27。

を指して、「言文一致」と呼ぶとするなら、それは明治期にはじまり、昭和戦前期から戦後期にかけて、一応、完成したと見られる。20歳男性を対象にした陸軍壮丁調査は、その初期では、尋常小学校低学年程度、同卒業程度、高等小学校卒業程度、中学校卒業程度の四段階のテストが行われており、つまりはリテラシー、識字率を五段階に分けている。時代が進むと、さらに高等学校卒業程度、大学卒業以上が加わる。1901年に京都府で行われた「壮丁普通教育程度」調査の文例⁸から判断するなら、高等小学校卒業程度が漢文読み下し体を読みこなせるリテラシーの持ち主と考えてよいが、大まかには、通常の日本語の読みの可否と、中国語の読みの学習者との三段階に分けられるだろう。そして、ここに、新政府の用いた文体と、明治10年代からの「漢学」復興が大きく関与していることは容易に推測がつくだろう。

「壮丁普通教育程度」調査によれば、尋常小学校卒業程度の能力の人が60%を超えるのが明治35年（1902）、80%を超えるのが明治41年（1908）。このころには国民の半数以上の人が、かなりの程度、読み書きができる状態になったと判断してよいのではない。したがって、このあたりで、general な教養も成立したと見てよいだろう。

そして、中学校卒業以上は「漢文」学習者であり、リテラシーにおける二重言語状態は続いている。これは明治中期に、英語学習とならんで、「漢文」学習が盛んになったことの延長にある。帝国大学の入試には英語と漢文の学習が必須であり、文学部の卒業論文は英語が漢文で書くことが要求された時代のことである。つまり、明治期の日本において、知識層の読み書き言語は、英語と「漢文」、そして日本語の三元化されていたことになる。それにドイツ語やフランス語の学習者が加わる。中学以上の「漢文」学習は昭和戦前期、戦後期を通じて行われ、この状態は持続するが、しかし、「漢文」学習熱は、日露戦争後に、実用的な中国語学習への意欲が高まりはしたものの、全体としては、かなり下火になったと推測される。第二次大戦には、さらに熱心ではなくなった。20世紀への転換期に生まれた人では、中学、高校を通じて熱心に「漢文」を学んだ人を別にすれば、「漢文」を素養として身につけているとは言いにくくなり、第二次大戦後に生まれた世代からは、さらにその比率は下がる。

d. 日本独自の文芸観の形成

「日本文学史」の形成は国粹保存主義とともにあったが、「漢文」の著述をふくむものとなったことには、明治中期からの「漢学」復興も一定の役割を果たしたと考えてよい。日本の知識層は、古代から時代によって濃淡の差はあれ、伝統的に日本語と中国語（「漢文」）の二重のリテラシーを保持してきたが、西欧の知的文化と対抗するためには、その伝統の再建を図ることが必要だったからである。その点でも、欧米の言語ナショナリズムとは大いに異なっていた。これによって、日本の知識層のリテラシーは、英語（一部にドイツ語やフランス語）とあわせて、三重のものとなった。

この三重のリテラシーが機能して、日本独自の文芸観が形づくられる。西欧のロマンチズムの理念とリアリズムの手法が移入されたことは、当時の古典評価において、『万葉集』も『源氏物語』も、ロマンチックで、かつ、リアリズムであると評価されて

8 山本武利『近代日本の新聞読者層』（pp. 169-170）は、1910年、京都府における調査の文例として、次の四種をあげている。

尋常二学年終了程度「赤十字しや。日本のこつき」

尋常小学校卒業程度「賣捌所は韓國満洲にも設けたり」

高等小学校二学年終了程度「知能ヲ啓發シ聴器ヲ成就ス」

高等小学校卒業程度「我ガ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我ガ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ」

いることから明らかである。恋愛などの感情を重視する点がロマンチックとされ、かつ、リアルな描写がなされていることを言ったものであるが、率直な感情の表出を尊ぶことは国学の理念であり、かつ、経験的な事実を尊重するのは「漢詩」「漢文」の基本理念である。つまり、ロマンチズムの理念は「国学」の理念で受け止められ、リアリズムの技法は「漢詩」「漢文」の理念で受け止められたと考えてよく、そのことによって、創造的で想像的であることを重んじるロマンチズムの価値観は剥落してしまい、日本では実景と実感を重視する文芸理念が形成されてゆくことになる。

ただし、そこには、知覚を認識の出発点にすえる、19世紀から20世紀への転換期の哲学の影響が働いていることも勘案しなくてはならない。それはいわゆる自然主義の文章論をリードした田山花袋において、1907年ころに「事実あるがまま」から、「見たまま、聞いたまま」を書くことへと、その理念の実質的な転換が図られていることにも明らかである。そして、知覚そのものにおいて、主観と客観は未分であり、ないしは一致するとされ、知覚のリアリズムが「自然派以降の新しい客観」（武者小路実篤）などと呼ばれもした。ここに、日本の20世紀前期において、はじめて「私小説」や「心境小説」が隆盛となる理由の一半は明らかであろう。

20世紀前期における日本の文芸理念が独自のものとして形成されたのは、西欧の理念を受け止める際に文化基盤のうちの一定の要素が働くことによってであった。このように受け皿(receptor)の役割を果たしたものと、その働きを解明することによって、ある時期の日本文化を構成する諸領域のもつ相対的な独自性を、はじめて明確にしうるはずである。

そして、西田幾多郎は、世紀転換期の哲学の動向をロマンティズムと実証主義および機械的唯物論の対立を根本から超えようとするものとして「現代哲学の問題」(1913)で論じているが、彼が、この新たな哲学の動きに立って、禅や陽明学を鑄直して形づくった哲学体系に理論的に表される「大正生命主義」は、すでに、そのような意味で「近代の超克」思想の展開といってよい。しかし、これについては、本稿では割愛せざるをえない。「大正生命主義」は「宇宙大生命」を世界の根本原理とする思潮で、その意味で普遍主義に立つものだが、1920年代には、その展開として、日本文化の相対的独自性を論じる文化相対主義が盛んになり、さらにそれは「西洋近代＝帝国主義を超える」ことを日本独自の任務とする思想が様ざまに出て、それが「大東亜共栄圏」構想を支える思想になってゆく。この過程を、はっきり認識しよう、というのが、私の提起している「近代の超克」史観である。

2. 第1次大戦後から対米英戦争期へー文化相対主義と多文化主義

a. 両大戦の戦間期

第一次大戦後の平和ムードの中で、帝国主義に対する民族自決権の主張と、その文化への変奏、すなわち文化相対主義が国際的な風潮になる。これはいわばポスト・インペリアルリズムとも言いえるような動きである。

20世紀のはじめ、ロシアのボルシェビキ(Bolshevik)の中で提起された「民族自決権」をレーニンが採択する。これを「世界革命論」、「万国の労働者よ、団結せよ」というカール・マルクス(Karl Heinrich Marx, 1818-83)の『共産主義宣言』への裏切りではないか、とポーランド生まれの女性革命家、Rosa Luxemburg(1870-1919)が批判した。国際共産主義運動の大きな分岐点になった問題である。民族自決権の思想はレーニンからスターリンに引き継がれ、ソヴィエト連邦の基本理念となり、少数民族にも民族自

治区がつくられていった。その時、強制移住させられて、ひどい目にあった人びともたくさんいたが、とにもかくにもソ連の内部で民族自決権を実現する恰好をとった。そして、ソ連が壊れてみたら、実はいずれの地域でもロシア人が支配していたことがわかった。そして、ロシア支配に対する反撃が起こって、多くの「国民国家」に分裂していった。

他方、アメリカの第28代大統領ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson) が、パリの講和会議で「平和のための十四か条」のうちの一つに「民族自決権」を提案した。ただし、アメリカは国際連盟には不参加。これらは、ともに帝国主義の横暴に対して民族自決権を認めよ、という主張であり、第一次大戦後の平和ムードの中で、文化相対主義、「それぞれの国はそれぞれの特徴のある文化を持っており、それを認めあって仲良くやっつけよう」という思想が国際的に広がった。日本でも、第一次大戦後、和辻哲郎 (1889-1960) など、多くの知識人が文化相対主義に立って、日本文化の独自性を論じるようになってゆく。

そして、日本は、1932年前後に大きな転換期を迎える。この時期については、「昭和維新」の動き、日本共産党の32年テーゼ、文化相対主義の行方、そして「満洲」建国の四つのポイントについて順に見てゆく。

1932年の「満洲」事変以後、日本でもファシズムを名乗る人が出てくる。戯曲『出家とその弟子』(1917) でよく知られた倉田百三 (1891-1943) で、天皇の下での農本主義革命論を唱える。これは、血盟団事件、5・15事件 (ともに1932)、2・26事件 (1936) と続く「昭和維新」の動きと連動する。時代小説で大活躍中の吉川英治 (1892-1962) も、これに同調していた⁹。しかし、この動きは封じ込められて、大きな大衆運動になったわけではない。もうひとつの大きな変化は、31年には「プロレタリア独裁革命」戦略を提起していた日本共産党が「民主主義革命」に革命戦略をダウンしたことである。日本の天皇制をロシアのツァーリズムとアナロジーして「日本はまだ封建制だから民主主義に移行すべき」と戦略転換する。世界戦争への危機感から、人民戦線的な発想もあっただろうし、地主階層が、といっても、多くは地方実業家だが、力を取り戻しはじめたことも背景にはあるようだが、「天皇制打倒」を掲げ、それゆえに大弾圧をくらひ、大衆からも孤立して、幹部から大量転向を出して、総崩れしてしまった。しかし、この戦略に基づく日本資本主義発達史講座のイデオロギーは、第二次大戦後も受け継がれ、一国主義の発展段階論的発想の基礎になり、戦後日本の「近代の出直し」戦略を「左」から補完することになった。

それに対して、反戦的な主張は、むしろ天皇制に依拠するかたちで持続した。西田幾多郎は『日本文化の問題』(岩波新書、1938) を書いて「平和主義天皇制論」を唱える。一口で言うと、天皇は歴史上、権力を超越した存在なので、侵略とか戦争とは相いれない。侵略戦争をしたら天皇制が穢れる、というものである。ドイツの建築家、ブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938) がナチスの政権を逃れて、日本にやってきて、天皇芸術の平和的性格を説くが、周辺に、その手のことを吹き込んだひとがいたと推測される。天皇が歴史をつうじて権力を超越した存在であるというのは、歴史の偽造というべきだろう。古代から天皇家の内部に血で血を洗う権力争いがあり、中世も南北朝の争乱があり、そして、明治期の日清・日露戦争を始めるには詔勅が必要だった。西田の、この考えは、当然、軍部から睨まれた。が、戦時中も、つまり最期まで彼は、この

9 鈴木貞美「吉川英治の歴史観」、『国文学 解釈と鑑賞』2001年10月号、特集吉川英治、pp. 42-58を参照されたい。

思想を貫いた。私は、これが戦後の象徴天皇制のもとになったと推測しているが、西田が最晩年に政府筋からよく呼び出されていたという証言があるくらいで、それ以上の根拠はない。戦後、象徴天皇制を「合理化」した津田左右吉（1873-1961）、和辻哲郎も、よく似た論理を基本としている。そして、西田幾多郎は『日本文化の問題』で、津田左右吉の歴史観を参照している。

昭和戦前期の和辻哲郎は、日本文化は重層的だという考え方に進んでいった。『偶像再興』（1918）あたりでは、生命主義的な観点から、「日本文化の底には仏教がある」と論じていたが、『日本精神史研究』（1926）では、神道がおおもとだと言い、「日本文化の重層性」を説き、『風土』（1935）、『尊皇思想とその伝統』（1944）へと進む。この重層構造として日本文化を考える発想が、どこからきたのか、フッサール（Edmund Husserl, 1859-1938）やハイデッガー（Martin Heidegger, 1889-1976）の「構造」と関係があるかどうか、未解決の問題である。

1932年に建国した「満洲国」では「民族協和」という政策をとった。「五族協和」とも言われたが、「満・漢・韓・蒙・日」の五族で、孫文（Sun Wen, 1866-1925）が「満・漢・韓・蒙・回（イスラーム）」の「五族共和」を掲げていたのを、イスラームと日本を入れ換えたものだ。そして、皇帝・溥儀を立て、ローマ法王にいち早く認めさせた。「日韓併合」の時にも大韓帝国の皇室と縁結びをしており、発案者の考えはともかく、大きな意味では皇室外交といえよう。溥儀とその政府が実質的に日本政府の傀儡であったことは、日本の既得権益の承認と日本軍の駐屯の承認を記した「日満議定書」（1932）からも明らかだろう。次第に「満洲」独立国家論に傾いていった石原莞爾（1889-1949）も、二度目の渡満（1937年10月）を前に記したメモに、〈民意の反映なし、傀儡政府なり〉と記していた¹⁰。のちにふれる『満洲浪漫』などの誌面からも、現地の官僚らの間で、民族協和は、ごく当たり前のように語られていたことが伝わってくる。満鉄調査部も転向したマルクス主義経済学者をたくさん採用していたことは、よく知られている。この時期の「転向」は政治活動をしないということを誓うことであり、偽装転向も多く、見極めがつかないようなケースも多々見られる。

「満洲国建設五カ年計画」を1938年につくるが、これはソ連の「計画経済」を導入したものである。「マルクス主義」経済学が政策上必要だったのであり、「マルクス主義」経済学者たちにとっては、「満洲国」は格好の実験場だった。宣伝戦略にもソ連のやり方を大いに学んでいたことは今日ではよく知られている。そして、これらは「革新」を掲げる日本の国内政策とも同調しており、いわゆる「総力戦体制」に撥ね返る。日本の軍国主義が、国家社会主義的な政策をも採用したこと、それゆえに内部にさまざまな亀裂をはらんで展開したことは、とりわけ文化面について改めて検討してゆかなければならない問題だろう。しかし、この時期、結節点がもうひとつあったことを指摘しなくてはならない。

b. 「大東亜共栄圏」とその思想

1938年に「新体制」、「大東亜新秩序」が言われる。これによって、「満洲国」および日中戦争の旗印だった「防共」が転換された。ナチスの「ヨーロッパ新秩序」に対応するもので、松岡外相が「大東亜共栄圏」構想を打ち出すのが6月。ところが、この「大東亜共栄圏」は範囲が一定していない。オーストラリアを入れるかインドを入れるかジグザグしている。ただし、忘れてはいけないのは1941年から一年半ほど、特定の範囲で円建ての為替相場制が成立していることで、「大東亜共栄圏」の思想を侵略戦争の

10 早瀬利之「石原莞爾『幻の満洲国再建計画』」、『月刊現代』2002年7月号、p. 42。

名目としてのみとらえて、幻だったとか、夢物語だったといってしまうと間違いを犯すことになる。

そして、この時期、「近代の超克」論が盛んになる。『文学界』の座談会が題名のみ、よく知られているが、これは、ひどく混乱した議論で、発言者も自分の立場を明確にできていない。昭和18年に単行本になったとき、だいぶ整理したようだが、それでも何が議論されているのかほとんどわからない。そして、当時、ほとんど問題にもされていない。それに対して、当時、大きな影響があったのは京都学派の座談会『世界史的立場と日本』の方だ。「ヨーロッパは没落し、アジアが世界史上に登場するチャンスだ」、西欧近代を「帝国主義」とし、これを超えることを提案するもの。そして、この立場は、pluralism、「多元主義」だと言っている。西田幾多郎の精神を受け継いでいるので、「支配」ということは絶対に言わない。日本は「父親」の立場で、リードする、指導するという。これは「家族国家論」のアジアへの拡大と見てよい。東アジアの諸国に受け入れられるはずもない考えだが、理念としては、多元主義を掲げている。また、彼らの三回の座談会を見ていると、1941年の対米英戦争開始前のそれでは「中国を侵略するのはよろしくない」と思っているふしがあり、対米英戦争が始まると、これがすっきりしてしまう。「中国での戦争は侵略ではなく、西洋帝国主義に対する戦争の準備だった」と見なすことができたからだ。そして、「皇戦」「聖戦」と平気で口にする。ここが西田とはっきり違う¹¹。そして、この対米英戦争の開戦をもって、気持ちの整理がついたという心情は、小林秀雄（1902-83）や河上徹太郎（1902-80）らももらしており、かなりの日本の知識人たちに共通する心情だったと見てよいのではない。

もう一つ書物をあげておきたい。当時、相当影響力をもっていた文芸批評家、保田與重郎（1910-81）が1941年暮れに出した『近代の終焉』である。「近代＝西欧帝国主義」に対して、日本が先頭に立ってアジアを興す」と宣言するもの。保田與重郎の歩みは、実際は、かなり屈折したものであり、「新体制論」に即して、このような立場に移行した、ということのみ、ここでは言い添えておく¹²。さらにもうひとつ、京都学派の若き俊英たちが多元主義を打ち出していたのに対して、別の形のアジア主義を示す詩をあげておこう。蔵原伸二郎（1899-65）の詩集『東洋の満月』（1939）より、「撃滅せよ」。

かくてわれらはつひに立上つた
われらの血脈は憤激した
かの蒙古の沙漠に
天山の麓に
居庸関の嶺に
祖先の神々の前に
蒙古民族の純血の中に
ああ われら民族よ すべて銃をとれ
立つて銃口をむけよ
かの西欧的なる われらを蝕みつつある
阿片のごとき思想に対して、その犬のごとき虚妄の正義に対して
今ぞ 敢然として銃口をむけよ
仲間たちよ

11 鈴木貞美『日本の「文学」概念』作品社、1998、pp. 234-235、および、「Nishida Kitarō as Vitalist: Part 1: The Ideology of the Imperial Way in *The Problem of Japanese Culture* and the Symposia on 'The World-Historical Standpoint and Japan',」*Japan Review*, May, 1997.を参照されたい。

12 鈴木貞美『日本の「文学」概念』前掲書、pp. 273-276を参照されたい。

われら民族の純血は われらの手によつて
 われら自らの機関銃によつて
 永遠に死守せねばならぬ
 仲間たちよ
 かくてわれらの精神は われらの祖先の血脈に目醒めた われらはつひに立上つた
 はつらつたる東洋の若者たちよ！
 かの憂鬱なる 凶悪なる毒ガスのごとき奴らを その盲目の犬どもを
 ちかつて陰山の北に撃滅せよ
 遠く 遠く陽関の西に追放せよ¹³

ここで、〈蒙古民族の純血〉、〈われらの祖先の血脈〉の語は、モンゴロイドという「人種」の観念、その一体性に訴え、ともに西欧的なものを排撃しようと、〈東洋の若者たち〉に呼びかけるためのものである。岡倉天心（1862-1913）のそれに、かかる血の色は滲み出していないが、まさに「血脈」による「アジアはひとつ」の思想が歌われているのだ。だが、この詩集が刊行されたのは、日中戦争のさなかであり、とすれば、この詩想は、およそ空疎な観念にしか映らなかったことだろう。が、対米英戦争の開戦とともに、この詩想を活きたものと感じた日本人もいたにちがいないのだ。この詩を鏡とすると、対米英戦争の開始によって「気分がすっきりした」と感じた日本の知識人たちの心情の変転の底にあったものを了解できるような気がするの、私だけだろうか。

c. 文化相対主義と多文化主義の問題点

この節の最後に、文化相対主義と多文化主義の問題について、簡単にふれておきたい。今日の「民族」と「宗教」の勃興現象は、帝国主義戦争と第二次大戦後の米ソ対立が抑えていたものが、噴出したかたちになっていることは、冒頭で述べた。第一次大戦後に広まった「帝国主義」に対する民族自決権は、皮肉なことに、今日、「国民国家の解体、細分化」に向かう動きをつくっている。そのように考えるなら、一国内部で「多文化主義」をとることは、エスノ・ナショナリズムの暴発を防ごうとする政策とも見ることができよう。今日の世界では、そのふたつの動きが並行して起こっているということになる。アメリカに関していえば、「人種」の *melting pot* と言われていたのが、少数民族擁護運動の高まりによって、*salad ball* に言い換えられた。「多文化主義」により、世界の縮図のように自分たちの国家を誇る。それがアメリカのステイト・ナショナリズムである。

「民族自決権」を文化に翻訳したのが、「文化相対主義」だが、これは単位として「民族文化」を想定するから、「民族」内部の少数派を抑圧することを容認することになる。そして、「支配」民族の文化と「国民文化」を同一視しやすい。日本文芸からアイヌ・沖縄を長い間、排除してきたのがよい例だ。かつ、固有の「伝統」を尊重することによって、支配的価値観を固定化する。

それに対して、*multi-culturalism* は「国民国家内部における文化相対主義」と言ってもいいが、*multi-culturalism* の語は、「政策」を言っているのか「現状」を言っているのか区別されないまま用いられることが多い。そして、実際に *minorities* 間で利害が対立する場合、カナダでもオーストラリアでもそうだが、解決の方程式はない。トラブルも、その地域に住み込んだ経緯、その後の対立の経緯によって、それぞれの質が異なるからである。中国の少数民族優遇政策も、多文化主義に数えられようが、チベットなどに対する政策にはかなり問題があることが指摘されて久しい。

13 『蔵原伸二郎選集』全1巻、大和書房、1968、pp. 90-91。

また、今日、アメリカやヨーロッパの「多文化主義」、そもそも、アフリカなどから優秀な人材を吸収することで成り立ってきたものであり、現地の人材の搾取ではないか、とも指摘されている。さらに、refugee（難民）の問題がある。許可した移民とも、政治的 exile（亡命者）とも区別されるが、亡命を装う難民についての方策は立てられていない。

なお、今日の文化人類学などでは、「民族」すなわち「言語、宗教、生活習慣を共にする集団」を単位とする考え方自体が歴史的な産物であり、また、あらかじめ、ひとつの「民族」を想定することなく、それぞれの要素とその組み合わせの歴史的な変化を考えることが必要であるという考え方が力を得つつある。言い換えると、どのようにして、その「民族」が「民族」として成立したかを考えること抜きにして、ア・プリオリに「民族」を語ることはできない。

III 日本文芸における多文化主義

a. 脱中心化

先に、明治期の古典評価について、ロマンティズムの理念とリアリズムの手法を受け入れつつ、それが国学と漢学を受け皿とし、さらに20世紀への転換期の哲学の動向も働いて、実景の描写と実感の表出を理念とする日本独自の文芸観が形成され、私小説と心境小説が盛んになったと述べた。が、古典評価の基準として、日本では、ヨーロッパにはないものが働いたことも、見過ごせない。日露戦争後に、徳川時代の都市の民衆芸術の呼び戻しが図られたことがそれである。日露戦争や重化学工業化の進展に倦んだ民衆が、太平楽な世として「元禄文化」にあこがれたのである。なお、ヨーロッパでの都市の民衆芸術の開花は19世紀に入る前後からで、徳川時代のそのような多彩な開花があったわけではない。

たとえば、永井荷風（1879-1959）は『帰朝者の日記』（1909）で、三味線こそ日本の国民音楽だと考える洋行帰りの音楽家を書き、『日和下駄』（1917）では、三味線の音が流れる都会の貧乏長屋に芸術境を見出している。前者は、ロシアなどにおける民族音楽への関心から、後者はボードレール（Charles-Pierre Baudelaire, 1821-67）の詩想から刺激を受けていることは明らかだが、しかし、荷風が尊んだのは、辺境の郷土色でも、パリの貧民街の風情でもなく、都市の民衆の間に生きる芸能であったことに差異は歴然としている。そして、荷風のこの姿勢には、大逆事件に対する強権の発動への反発、そして、「生命主義」の流れにある「享楽主義」が合流して、「デカダンス」の姿勢を生んでゆく過程が如実に見てとれる。そして、荷風の姿勢が、反時代的な傾斜を強めて、閉じこもる先のひとつに漢詩の世界があったことも、またたしかである。

荷風だけではなく、日露戦争後には、近代文明の展開、競争社会の激化に対する知識人の「下降意識」や、それを self parody として表現する流れがはっきり指摘できる。田山花袋（1871-1930）の『蒲団』（1907）をはじめ、谷崎潤一郎（1886-1965）や宇野浩二（1891-1961）、牧野信一（1896-1936）らの「私小説」が self parody の技法を駆使しているのが好例である¹⁴。吉井勇（1886-1960）が祇園を懐かしむ短歌にも、「祇園を出られなくなってしまった私」という調子のものが挟まれている。デカダンスの姿勢が頭

14 “Eroticism, Grotesquerie, and Nonsense in Taishō Japan: Tanizaki’s Response to Modern and Contemporary Culture,” *A TANIZAKI FEAST: The International in Venice*, ed. A. Boscaro and A. H. Chambers (Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1998), pp. 41-53 などを参照されたい。

著である¹⁵。

それらとは、異なるが、日清・日露の両戦争後に、「自然主義」の流れに立つ広津柳浪（1861-1928）が、戦争、ないしは戦後の犠牲者とでもいうべき人びとの姿を「非国民」（1897）など書いていることにも注目したい。また、正宗白鳥『入江のほとり』（1915）も、東京に出て出世の道を歩む長男、家の跡をついだ次男、勉学の道を東京に求める妹らをよそに、ひとり郷里で代理教員として鬱屈した生活を送る三男を書いて、脱落者の存在を浮き彫りにしている。これらは国内で時代の流れからドロップ・アウトする作家の姿勢、ないしは、そういう人びとを題材にした小説群であり、「脱中心化」の思想が読み取れるものである。では、「被抑圧民族」についてはどうだろうか。

b. 被抑圧民族、その他のマイノリティーズ

少し時代が戻るが、明治期の「政治小説」の中には、「反帝国主義」（弱小意識への肩入れ）の姿勢があり、「非抑圧民族」の側につく姿勢が明らかに指摘できる。東海散士（1852-1922）の長編小説『佳人之奇遇』（1885-97）は、主人公と弱小国の独立運動家たちとの政治ディスカッション小説ともいうべきもので、これは当時の日本がおかれた立場から当然といえば当然だが、この流れは、末廣鐵腸『政治小説 南洋の大波瀾』（1891）へと受け継がれてゆく。矢野龍溪『浮城物語』は、いわば南進論の小説として書かれたものだったが、その日露戦争後の増補版（1908）では、インドネシアで独立革命を推進した日本人たちが、日本に帰らず、当地の人間になる結末に変更されている。

そのあと、この流れは途絶えたようで、だいぶ時代を経て、ふたたび「民族」問題への関心が強くなったころ、国際情勢や世相に対する鋭い批判を交えた久生十蘭『魔都』（1937）が、日本にやってきたタイの王族を助けるコメディ仕立てをとり、また橘外男『ナリン殿下への回想』（1938）が、日本に遊びにきたインド皇太子を案内した日本人の口から、イギリスの強権下に彼が悲哀を味わわざるをえないことを語らせている。インド革命をはじめ、アジア諸国の独立支援は日本のアジア主義者たちの長きにわたるスローガンだったが、昭和十年代には「非抑圧民族」が西欧帝国主義に翻弄される姿を探偵小説作家たちが書いていたのである。

次に、日本国内の被抑圧民族について。アイヌについては、『古事記』の英訳（1883）などを手がけたチェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935, 1873年来日）がアイヌ語の辞書を編纂し、それを手伝った金田一京助（1882-1971）が口頭伝承の叙事詩ユーカラを紹介するなどしてきたが、小説では鶴田知也「コシャマイン記」が1936年の芥川賞をとっている。

沖縄においては、日本政府が琉球王朝を解体し、編入をはかったことに対して、当初は、相当の反発があったものの、明治期を通して本土への同化政策が進展した。柳田国男（1875-1962）らの民俗学調査が進み、その刺戟を受けて、中世歌謡の「おもろ」の発掘などへの道がひらけた。佐藤惣之助『琉球諸島風物詩集』（1922）もある。

昭和期の在日朝鮮人については、張赫宙（1905-98）が戦前、戦後を通じて活躍、金素雲（1907-81）も朝鮮民謡の紹介に活躍したし、文芸春秋系の雑誌編集者として活躍した馬海松（マヘソン）もいた。日本人の作家のものとしては、豊島與志雄（1890-1955）が朝鮮人留学生を主人公にした「李永泰」を1942年に書いている。

さらに、「外地」を舞台にした文芸や日中戦争期からの「国策」文芸に多数、被抑圧民族が登場している。樺太では宮内寒弥（1912-1983）がアイヌやロシア人、混血児の

15 「近代百年の私—短歌をめぐって」坪内稔典編『短歌と日本人 第V巻 短歌の私、日本の私』（岩波書店、1999年5月）pp. 37-77 を参照されたい。

ことなどを題材にとった小説を手がけているし、台湾では、少数民族より中国の漢民族より日本の農民がひどい目にあっていることを書く小説を、もと「プロレタリア文学」系統の作家が書いてもいる。「プロレタリア文学」系列の「外地」ものでは、平林たい子（1905-72）のものも逸することはできない。奉天（瀋陽）を舞台に中国人労働者を主人公にした八木義徳『劉広福』（1944）は、翌年に芥川賞を受賞している。そこで、1935年ころからの「外地」の文芸動向と、その「内地」での受容の動きに着目してみたいが、その前に、そのほかのマイノリティーズを書いた小説や日中戦争期に中国大陆で反日活動をした作家たち、また戦時下に「内的亡命者」とでもいうべき姿勢を保った作家たちにもふれておこう。

被差別部落民を主人公にした小説として島崎藤村（1872-1943）の『破戒』はあまりに有名だが、中里介山（1885-1944）の『大菩薩峠』でも剽悍な登場人物として、被差別部落民の少年が大活躍するし、有名な川端康成（1899-1972）の『伊豆の踊子』の旅芸人も被差別部落民という設定である。織田作之助（1913-47）の昭和戦前期の大阪のある一角を舞台にした「がたろ長屋」ものも、そうである¹⁶。子母沢寛のサンカないしはマタギについての追跡もある。

捨て子は井伏鱒二（1898-1993）の「へんろう宿」という傑作があり、「私生児」は高見順（1907-65）の昭和十年前後の自伝小説、「らい病」患者は北条民雄『いのちの初夜』（1936）という具合に、日本文芸にマイノリティーズは満ち満ちている。移民ものでは、アメリカに渡ってパナマ運河の建設でひどい目にあった少年たちの話など、久生十蘭『紀之上一族』シリーズがある。

日中戦争期に中国で反日活動を展開した人びともいた。呂元明『中国語で残された日本文学—日中戦争のなかで』（西田勝訳、2001）には、鹿地亘（1903-82）、池田幸子（1913-76）、長谷川照子（緑川英子、1912-47）らの中国語で書いた小説が発掘、紹介されている。

また、第二次大戦中の「内的亡命者」としては永井荷風がそういえるし、谷崎潤一郎も『細雪』が連載2回で発禁（1943）になって以降は、発表のあてもなく、作品を書き続けた。江戸川乱歩（1894-1965）も、ほぼ筆を折っている。大家は書かなければ、それですんだといえるかもしれない。書かないと生活できない人たちはなんとか書こうとしたので、屈折した脱国策的態度もかなり見うけられるが、分析がむづかしい。坂口安吾（1906-1955）や太宰治（1909-48）などは、明らかに国論の主流からは逸脱しているが、それだからといって、対米英戦争に正面から反対したとは言えないところもある。反戦の姿勢を保持した石川淳にしても、日本に比べたら、ナチスの方が立派だというようなことをエッセイに書いたことについて、戦後、自身で「筆が曲がった」と反省している。

c. 1935年ころからの「外地」の文芸、その「内地」における受容

1935年ころからの「外地」の文芸と、その「内地」での受容については、浅見淵（1899-1973）の『満洲文化記』（1941）が、日中戦争がはじまるころから、「異民族文化」への関心が高まったことなど、当時の文芸の状況をよく伝えていて、格好の手引となる。日本内地でもバイコフ（Nikolay Apollonovich Baykov, 1872-1958）の『偉大なる王』が、『満洲浪漫』同人、長谷川濬訳で刊行されて、1940年ころに大いに人気を博したし、大内隆雄訳『原野』（三和書房、1940）、『蒲公英』（三和書房）に「満人」作家、古丁らの作品を収録、注目を集めて、古丁の作品集『平沙』が中央公論社（1940）から

16 鈴木貞美「20世紀の芸人—織田作之助の位置」『季刊アーガマ』96年11月を参照されたい。

刊行され、『中央公論』1942年9月号には「凍つた園庭に降りて」が掲載されてもいること、さらに朝鮮人作家の選集も出されるなど新たな事態が進行したことなどが記されている。『文芸』『三田文学』などで「満洲文学」特集が組まれもしたし、来日した古丁を囲む座談会など当時の雑誌に「満洲」の文芸への関心が決して低くなかったことをうかがわせる記事は多い。

朝鮮半島在住の作家たちは、日本への抵抗から、ほとんどが朝鮮語で小説を記していたため、翻訳紹介が遅れていたが、1940年ころに選集が刊行されるなどした。李光洙「無明」、李孝石「蕎麦の花の頃」「豚」、安懷南「軍鶏」、金東仁「楸い山」、金東里「野ばら」、俞鎮午「鴉」「滄浪亭記」「秋」「金講師とT教授」、李泰俊「農軍」、金史良「光の中に」(1940、芥川賞候補)などの作品があげられよう。

ここで、中国東北部における文芸の展開を大雑把に見ておくと、まず大連で詩誌『亜』(1924-1927)が出て、安西冬衛、滝口武士、北川冬彦、城小確らが、モダニズム詩を展開する。1930年ころには『大陸文学』『街』などの同人詩誌がそのあとを継ぎ、古川賢一郎詩集『老子降誕』(1929)が刊行されたことなどは、のちにふれる『満洲浪漫』の編集人、北村謙次郎が第二次大戦後の回顧録『北辺慕情』(1960)でよく語っている。

そして、1932年に満鉄職員を中心として『作文』という同人雑誌が大連で創刊され、これはのち、奉天(瀋陽)に移る。『作文』同人選集として浅見淵編『廟会』(竹村書店)があり、また竹内正一に創作集『氷花』(1938)があり、彼は内地の『新潮』などにも書いている。他にも、日向伸夫創作集『第8号転轍器』(砂子屋書房、1941)が知られていた。彼らは「文話会」に集まり、『満洲州文話会通信』を刊行、『満洲文芸年鑑』を三巻(1937, 38, 39)編んでもいる。他に、大連では矢原礼三郎らが詩誌『鵲』を刊行、歌誌『アカシア』では甲斐水棹がよく知られた。また文化総合雑誌とでもいふべき『満蒙』には民俗研究などが多く掲載されていたという。

大連の動きとは別に、奉天(瀋陽)では、木下杢太郎が1916年から20年ころまで奉天医大(のち、満洲医科大学)に滞在し、谷崎潤一郎らが訪れているが、その文学部から雑誌が出され、福家富士夫『眠剤』(1937)、冬木洋二『青き夜の医師』(1938)が単行本として刊行されているし、高木恭造詩集『鴉の裔』(1939)も知られた。

しかし、中国東北部における文化活動が本格化するのには、「満洲国」建設後に新天地を求めていった文化人たちが新京(長春)に集まってからのことといつてよい。満日文化協会が1933年に創立され、日本の東京・京都帝大の歴史学者や画家、作家ら文化人のそうそうたるメンバーが協力体制をつくり、考古学調査や絵の展覧会などを展開した。内地の文学者もしばしば、新京を拠点に「満洲」の各地を旅した。1938年には林房雄、小林秀雄、1941年には横光利一、菊池寛、小林秀雄、1942年には中谷孝雄、浅見淵、富沢有為男、中河与一、坪田譲治、村山知義、小田岳夫、島木健作、阿部知二、川端康成らが新京(長春)を訪れている。1940年には山田清三郎、望月百合子、壇一雄、石森延男が新京に入り、滞在生活に入った。他に、葉山嘉樹が開拓団に入り、八木義徳が奉天(瀋陽)に勤務先を求めるなどした。

雑誌『満洲行政』は官吏向けのものだが、文芸欄には在満の中国人作家たちの作品を翻訳掲載した。まだ若い彼らは、日本人支配層への警戒を緩めることなく、しかし、作家たちとはある程度、親しくつきあい『明明』(1937-)、『芸文志』(1939-)などの同人雑誌を刊行し、東北部に特有の暗い情念を秘めた作品を物してゆく。南部では、爵青、田兵、小松、呉英、夷馳ら、北部では蕭軍、蕭紅、羅峰らが知られる。

満日文化協会とは一定の距離をとりながらも資金の提供を受け、もと『日本浪漫派』の同人だった北村謙次郎の手で1938年に『満洲浪漫』(1941)という文芸同人雑誌が創刊される。緑川貢、逸見祐吉、壇一雄、横田文子、大内隆雄、長谷川濤、長谷川四郎、牛島春子らが参加、小説などは再録も多く、『作文』の同人たちからの寄稿もかなりある。これを見ると、いわゆる「満洲」文化の核心部を覗き見る気がする。文化官僚たちも寄稿していて、それぞれの思いが錯綜している様子が、よくわかる。官吏の夫人だった牛島春子の「祝といふ男」は芥川賞候補となり、『新潮』にも小説が掲載されている。中心人物で満映の脚本家だった北村謙次郎には『春聯』(新潮社、1942)などがある。

1939年には伊藤整(1905-69)、高見順(1907-1965)らが「大陸開拓文芸懇話会」をつくり、1942年に『芸文』という文化総合雑誌が出る(1944年より『満洲公論』)。『満洲浪漫』『芸文』には、中国人の作家たちの翻訳も掲載されている。『芸文』の立場は「国策的革新」で、「内地」の革新官僚たちと同調したような流れで、この流れがやがて内地で「大日本文学報国会」をつくってゆくことになる。『満洲浪漫』の人たちは、この流れに同調している面もあるし、対立している面もある。内地では、山田清三郎編『日満露在満作家選集』(春陽堂)、川端康成・岸田國士・島木健作・山田清三郎・北村謙次郎・古丁編『満洲国各民族創作選集』(創元社、1942)が刊行されている。「革新」を標榜し、ソ連から多分に学んだ国策が、あるいは、それを受け取った「報告文学会」の人びとが、多文化主義を展開していたことが知れよう。

「大東亜共栄圏」の思想は、侵略戦争遂行のための題目ではなかった。もちろん、この多文化主義政策は、日本が対米英戦争を有効に戦おうとする以上、東アジアの同胞を味方につけなければならないゆえのことであり、しかも、この時に及んで文芸作品の翻訳紹介など行ったところで、実際に行ってきた蹂躪と抑圧と差別を糊塗しうるものではないことは、いうまでもない。ほとんど効果のない懷柔策と断じてよい。が、しかし、そのタテマエを逆手にとった人びともいただろうし、韜晦に抜け道を見出した人もいたこともまた事実である。ひとつひとつの作品、ひとりひとりの作家の、その時どきの思想の襲まで読み破ることなく、「国策」の実際にも触れないまま、「国策」に沿っていたとか、いないとか、を基準に断罪するばかりでは、この時代の文芸を扱う意味はない¹⁷。

ここで、『満洲浪漫』の中心人物、北村謙次郎が編集した『五彩満洲』(1944)という絵本を紹介しておきたい。このタイトルも「五族協和」を意識してのものだろう。最初は逸見祐吉の詩で、モダニズムを経由したことが明らかな絵は関谷正明。次は「満洲の泥と紙との搬不倒」。満洲の起き上がりこぼしのような人形を歌った詩人・古川賢一郎の詩。この人の詩集は、昨年、西原和海氏の手でまとめられた。それを山丁氏らが中国語に翻訳している。山丁氏の晩年に私はお目にかかる機会があったが、そのとき、この絵本のことは知らなかったの、残念なことをしたと思う。次は赤羽末吉の絵。私は戦後生まれだが、赤羽末吉の絵本はかなり見た記憶がある。蒙古族の親子を描いた絵もある。この絵本は北村謙次郎が「満洲国の本当の姿を日本の少年少女に見せたい。同時に満洲国の恵まれざる少年少女に美しい絵本を与えたい」という思いで、昭和19年に編集発行したもの。面白いのは付録に、漢字をカナ表記するやり方がついており、これは国民党政府のやり方に似ているらしいが、裏に「満語」の声の出し方を説明してある。そ

17 鈴木貞美「『満洲浪漫』の評論、随筆」(『満洲浪漫』復刻版別冊、ゆまに書房、2003)を参照されたい。

して最後に、本当の「満語は満洲の人たちに習わないとわかりません」と書いてある。

日中戦争期には、日本政府は「日満一体化」を強く打ち出し、朝鮮半島で行った「皇民化政策」と同じように「日本語を教えろ」と要求しているが、昭和16年あたりでも、満洲の文化官僚の中には「演劇は中国語でやらないと土地の人はわからない。そのうち政策が進んだら日本語でやる」と先延ばしする姿勢を示す人もいた。そんな投稿が『満洲浪漫』に掲載されている。そして、対米英戦争期には、「満洲国」は「東亜」共栄圏の模範たれとのかけ声が強くなる。「満洲」で最後まで「民族協和」の精神を生かそうとする人たちがいたことはこの絵本からも明らかだろう。

東南アジアに赴いた作家としては、井伏鱒二(1898-1993)が短い小説に現地人との交流のさまをユーモラスに書き、高見順も南方の植物観察めいたエッセイを書き送っている。ともに報道班員の仕事としては、抵抗の姿勢が見えるといつてよいだろう。以前、どこかで指摘したことがあったと思うが、昭和19年ころになると、岡田誠三(1915-94)「ニューギニア山岳戦」(『新青年』3月号、1944年上半期直木賞)など、「尊い犠牲」を書くという名目のもとに、戦争の悲惨さを書くことを主眼としているとしか思えないような戦場小説が発表され、評価されている。検閲が緩んでいることも手伝っているようだが、このあたりの説明は実に難しい。

IV まとめに代えて

敗戦後には、たくさんの作家たちがそれぞれの戦争体験をもとに詩や小説を書いた。外地の体験も数多く書かれているから、そこには当然、被抑圧民族の姿も多く登場することになる。

私は「敗戦小説」というテーマ設定をし、何本かエッセイを書いたことがあるが、その中にはアレゴリーを用いて政治批判をする小説の系譜を追った「寓意の爆弾」というタイトルのものもある。それらにアイデンティティを喪失した者たちの系譜として武田泰淳(1912-76)、安部公房(1924-93)ら、捕虜体験を占領下の日本の寓意として描いた大岡昇平(1909-88)の『俘虜記』(1948)などをあげて論じた¹⁸。捕虜体験はシベリアに抑留された長谷川四郎(1909-87)や詩人の石原吉郎(1915-77)も書いている。そのとき、私は気づかなかったが、安岡章太郎(1920-)の「ガラスの靴」(1951)、「ハウス・ガード」(1953)などは、日本人の占領下の屈辱をアレゴリカルに書いた作品であることを、エジプトのカイロ大学のモスタファ・アハammad氏が明らかにした¹⁹。「第5次中東戦争でエジプトが負けて惨めな目にあった時の気分で安岡さんの小説を読んだらよくわかった」と。これには、なるほどと感心させられた。

アイヌについては、武田泰淳『森と湖のまつり』(1955-58)、石森延男『コタンの口笛』(1957)などがあるが、武田泰淳には中国体験が、石森延男(1897-1987)には「満洲」体験があり、それが民族問題への関心を育てたといえるかもしれない。また、石川淳(1899-1987)の「寒露」(1946)が被差別部落に、ある理想を託しているし、野間宏(1915-91)の『青年の環』(1917-71)という大作もある。

大江健三郎(1935-)が被爆者のことを書いたり、沖縄のことを書いたりしているのはよく知られているし、中上健次(1946-92)が「路地」を舞台にし、島田雅彦(1961-)

18 鈴木貞美『人間の零度、もしくは表現の脱近代』(河出書房新社、1987)所収。

19 アハammad・M・F・モスタファ「『愛玩』生活能力を欠いた一家と回復への期待—安岡章太郎の「戦後」の始まり」(『日本研究』第19集、1989)、および「被占領者の屈辱—安岡章太郎『ハウス・ガード』・『ガラスの靴』をめぐって」(『日本研究』第20集、1990)など。

が「亡命者」をテーマにしているのも、こうした日本の文芸の流れの上で、考えることができる。

このように、人道主義、民族主義、国民国家主義、アジア主義、帝国主義、反帝国主義、近代化主義、反近代化主義、デカダンス、生命主義、プロレタリア国際主義などの思想が相互に対立したり、複合したり、交錯する諸状況の中から生み出されてきた多様な文学作品に分け入ってみると、まだまだ分析、評価しなければいけない、隠れた流れがたくさんあるにちがいない。その作業は「日本は近代化しようとして失敗した」というような歴史観、そしてそれに基づく文学史観ではなく、実にさまざまな西欧の現代思想を受け取りながら、またさまざまな海外経験などが交錯する中で、実に多様な文芸作品が生まれていた、という観点に立って掘り起こしてゆくことが肝心だろう。このようにして個々の作品を再評価し、その相対的な価値を考え直すこと。一つの立場から、個々の作品を再評価する作業を積み重ねてゆくと、当然にも、作品の歴史、すなわち文学史の書き換えになってゆく。さまざまな立場の人が、これを行えば、いくつも文学史ができる。それでよいし、それらを付け合せてゆくなら、日本文芸のより豊かなシーンが明らかになろう。そのように文学史の書き換えに通じるような研究がなされたとき、そのときこそ、それは有効な研究だと言えるだろう。これが、私が長年、主張しつづけている「文学史の書き換え」であることを明らかにして、締めくくりとしたい。

*本稿は、鈴木貞美「グローバリゼーション、文化ナショナリズム、多文化主義と日本近現代文芸」（『日本研究』第27集、2003）の内容を本シンポジウムのために短縮、編集しなおしたものである。